彩板
絵入

世間妓氣質

巻之一

遠 13
1650
4

牧條田
文庫
饗庭文庫
饗庭藏書
牧條田

世間姑息貧老之口

目録

一 今を盛りの花者而をろうひ氣立る吏
物の中より一人の姑息の氣かゝる主事者
附り鍋焼津り喧嘩見花形町の住居屋が
門口で目を塞るゝ聾の大道

㊁ 女房は嘘を流し眞女
乃性相違香を焚て紙絹を染一人姫
潜り當世將り奥流れ那織を高々て揚屋へ
やり遣姑は機嫁は糸を入る
嗚れ有はひ

世間姑氣質奏之部

㊀ 今世寡り此花番屋を美しの氣を支婦は中は
一人は姑。い氣はかるく美を寄糸り
潜雑法は嗚や兄花彩町の紙右屋門巳目を
杉ごろす奪は大道
詩經曰穀則異室死則同穴 こを支姑ふ仕義を
法ものは同居せず。婦人は居るを家と云て夜敷を
色よいろ〻を一ッまぢへおろ屋てなるが元手を門穴は
埋。支死て婦嫁は嫁ざる法なる中へ堀と一所は葬義
ものなり況や支姑災難でも逢時は居を

こと　そこなけを雖とも捨てさらず。是ぞ元祐の翫
して俗を偖置は定めし歎といひつ。あるを大坂難波
橋北詰町住人ありしが田舎新入鑑ねさげ始めをれ
る代物を商ふて古ふるをせる見世先を漏きれ
ぬ水門暖簾。紅香炉美脚といふ元祐新入鑑
美脚斉て人形の能美男なるを女房よせ一部れ
始ると大坂中で評判のあ給の器量こそ世計と見へ
て色の源さそのいつとも賀りれ花乃風俗婆ちれ
ちややさい言風よまち称れなびくがごとく名を惜
いひしがほんの金ぞりけこそ支婦中もつまづく別

ちらこつちらとよむりを立ものしまそも沖こぎぐん
でうちへ沖ちとさ乗ぐれあてことをひ。姫をたりく
浮付てそをされ男をそるでいなかいぐまそつと結構
すぐて乗りもちち行のない舞度ちく新ぐ男くい
ゆへ切てけんを抜そがれ酒ごとを仕出。ゆよ女房
子をどをうらへてちくらの酒でもけんでもいる時や
もぐつちをたちをすのぐん乗をつけや。乗れもい人どや
とだりたりかてたはきるを臺をうぶやんあとに嵯
徳よ嫌らまくも男ゆちでほちよ支いもちまぐ
をたりかおりとがちけしく中ゆへ。毎りいちく稼

成ちとちをさげんを紙付りをて稜乗を伝こう
腰がいちひれけりがぐちひれといちく姫や下女ちいを乗
ぬけ沖ほど接麻をやちをせ。けりちこ一人れ毎紙り
家田口を人が毎日をに行。ふぐり志紙しで天宮れ
一つをけりちと二文と丁稚が乗世でほぶやく伝
なちを移り稼家。移ちしちこ行る日堂阪すぐちて
ちいうをたりひ出天王寺まりしてこうといて
すちぐん南をうちへ男ゆがあちをいるでく乗人
なるゆへ近所れお社ぐをやちて姫れ書よ付ケ
二文と丁稚ちをこ乗ちを付くり下女

今出花でござります

ぜんせいの
あれはゆめか
うつつか

一人つまを出けるが此姑射の中よりいろ〳〵と
氣を吐る姓。乃江戸町ゆと天王寺とやあて泥江
此河泥江へ氣りかゝり順芝町とあくさて
新町此中を通りけるが泥しも泥なりは此まの
そらいて極此綿を織変天職此新町を河原
泥江ものもそくつ里此風景とながら先此向より
人不すぐれし美男馬形二つ此袖よ馬でり此也
形織。はるる此帯よ金糸織りは腰結。いそ〳〵とて出来る
人を絵く〳〵ゑをば舞の美男姑射のうりさきとし
て立こぐ海りしう美男ハゐんは氣も付ずあゆき来る

とゝ和泉右衛門と云ふ揚屋此門より売と中居こう
ゑりゝ出これを美別さ面お約束おこてが逆さま
変面もお結うをとい美男とゝゑひ泉右衛門へ
入けるゆへ姑いろ〳〵肝とひやー。揚屋此門とけぞけば
海ぐゝ〳〵ゑる居うして美ゝゝとゝゝて面ゝゝ
て。門よ姑無さめ新。腹立新ゝ揚屋へゝり西風
かゝせんゝ此新ゝ又新ゝ歩ゝゝゝ先ゝこゝ試
姑よゝゝゝゝゝゝゝゝゝて金沢せんと河泉ゝけゝ
腰ゝゝゝゝゝゝゝ彩所結やう腹ゝ海ゝし
ゝゝゝゝゝと新宿へ逆見出ゝて海りける

㊁ 実説ふる女房は給ふ誠う海士貞安は性相
無雲よ海をもて云はるる所は一人姫
潜り当世時りる奥島は形織をもせて揚屋へやり
こぶは姫は機嫌能よみて入さ海ふ兵衛掃
分よりて多里は恋ひ輝る親父は眠るも来たそ
ふそしよ況やら変姫。男脚ゲ弓兵衛を入て
たころさ行ものろくしてころ。お福は是いさるも云
ま入て恋がでくく新へ通りを矢屋よ姫が脚くろ入て
おそそそ記年めゲを都くく氣と付潜りをせる。お福ゲ
る行ぎとらのどやとゆどゲ入ゲ兵と男ひいさる猪熊と

いふがくふぐらそれくるものとん出て来る。矢まちくあるを百
かくらひ付て行の海尼法くあるを捕りるめて弱所は中とあり
しゲ男脚めゲ結捕るあ絶とあ名れて服指やでこう行石
やといふ揚屋へ入ると中兵衛が出迎矢列は変屋ゲ行
かひてどやといそれ大盃ひくらひ。よくふかく捕てよゆこて
ふくふりと行もあて捕よひるまでひ作中よ居宅も色
屋敷もこるよすくふ捕くる事。ふんと見でもれゲくもあへ
猪熊は入ひ捕ゲひる。入舞よ方代ふまれて出ふ五やつく
親父捕へひるけの行捕ゲるる。ゲ入やくと姫とくくへ
法ひ熊つ来くり捕ひる中女ゲくう等男猪を捕潜とゆき

出してかなしきかをしいたそろしくらも又笑ひ出す。うしろ
姿ふり姿姫も母がいうことをきてびの介
眼差をもやしを見ぬ張へ寄り日向へ出てもあれ
事無へうしろよれつくろうて片時ばかりさめずもぬ
ときこえぬ結方と濡ぐ者しやうして指すりしが又
ちろりとひまを見むまい妾めうけを
うらへて物よ有りて男れうけ格氣をせぬが如ふれ
動文ちうそひ世示の一巻。まく指ろよりも入まい色と
ひ立ち源よ入れど入年ゆへよ姫がのをどり淫熱者と
無間でいちまび母様をれ氣がふんへそんのそしやうろう

もちまず濡よ貞女れ乃を寄んで文れ恋をのを張さんと
出ろ寄とれ烈しき母が脇元へちりよ。指よ山藤が
ちいあよびつりあれてお脇れ立ちれ形とやそのの
ひ指もあいおれ乃方。ふんれ恋の方が別銀をを
形町をひいさを濡せう。ふよ結長屋の大をせハ形もゆて
れをすを形とやまず小れ今指を指産恋して
濡時ふ中ふ形ふれ屋く十日ふよ恋の長が濡てを
を中ふて高よれれまふ初てれ高よ京絵中恋
珊瑚瑞れ結メ花よ金三十ふ長が高。年中れ江運局
ふれどお金ふ毎日掃ひひ号れへお銀初れ結文が

五十五年。今職方よこてらへてありますひらへまで行
程は東がみちをもとまず近年は海道を能おぼえ申れど
一ツ程程遠き事なれども是程の事なれば
無異形所無ものよ西夜とつまりてりこうまるほしをこと
ちらくぬけてそもひ付合ものゆをもはる商も出るまど
分銭といふてをもつかもつかりとして
切銭ばかりなれば。西洋無程よりつをもはれ起かと
銀まてあてお銭をもまます所業。今銭をもつかて
見切よりて高を引とをもつどみもくこけりく銭をれ
小ぐもぐ銭無ものと形へおぼえ銭しらまきゆへなる銭

それ無程へ吹されぬ八ぢ銭じやが蒙れ程を商事銭
ちるのもをて銭をあけるが基礎。を銀銭をれみぐ
てを高実れ冥銭をれをもつひ作れ嘲るに八十五銭
の金を彩へて無程よりんれるをを八門ををれ銭物で
商ぶり程よりて出。夜逃前のをを商と書ら信て
形所へお銭。銭れりまり西よ引ををけいて
知る程よりてをれをつをを。極嘲るよ銭銭を無程
渡しをれをで程をとおぬ中て西ちををへて形所へ
りをつをををおををををを所をおりく
銭ら更てをおをいをを中は。今をで銭銭

萬袋物

を私しが吾妻やうまさに別町遊び。さけて、あ[illegible]
長船が到源の変清出さまるお[illegible]
はんへ[illegible]所辺ぶ別。[illegible]
せのて出さまさしぶあ[illegible]
けやうやで行まれ[illegible]
まさしあ。[illegible]
あ[illegible]出て変れがあてじゃなしくまさ[illegible]
行さてあれあ[illegible]
ちもお業じ[illegible]
よ[illegible]

けらさ海やう上の[illegible]
ぶぐ[illegible]
しが[illegible]
あて今り[illegible]
れ海ら[illegible]
家ま[illegible]
[illegible]
でい[illegible]
でさめ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

給ひ源氏殿新織えんを時はまとをもてやてや
彩町八町ゝ京より源氏でもいわれ奥島でハ神ちち
ゞゝとを年ゝしいとさげん。彩町うゝ氣とん
で元て御ゝゆへ草邸て神ゝけが出ゝ家体よ二階
元愛でゆうと体と祝ひつさげごんぢごゝるゝそそ
しと殿のお家元世話しゝ毋祝とぬつ色うゞゝゝ
吹出瘤。ゝめゝてれ二本丈よ胸を痛居るゝも者ゝび
本縁見西よ風呂愛ゝゝげ酔とんをゞとゝそゝれ
附性祝ゝゝるゝよ体見居ゝふ居ゝれ面れそ尾
家ひくゝゝ見ゝて運入夫ごんゝゝりゝく義れ

四へ仕ひり。江戸屋へ引ていと毋ゞゝ義てゝゝ見
ことを面白ゝゝゝひまげて祝そゝゝまゝ祝をゝる
源ゝ。ゝしをを丈脇ゝる祝ゝんをび祝ゝゝよ丈へ
れ源。ゝ愛毋祝面ゝれ行ゝよ氣をつの
ゝて彩町でのゝゝ氏。毋祝ゝゝゝゝゝ出毋祝ゞ
今ゝゝゝゝんゞゝゝてゝ面ゝゝゝ毋ゝゝそ氣を
祝ゝれ祝よゝをゝゝんせ。ゝゝ氣れ毒ゝれ市れ
尾ゝ尾。出ゝ海ゝを毋れゝがんを毒ゝれとゝを氏ゝ
まりを源よゝゝゝよ八十ゝ毋ゝ出ゝ金ゝんを祝ゞゝれ
ゝ海ゝ。ゝ祝よゝをゝけてゝを祝毋れを尾ゝゝ

まことしが君四位の侍従より代始てやりとりせ
し面をとりて物語りする毎へ人あてやきれと詠る所れ
如何ほどんどの嫉しく思ひ給へ一向男面をそ
なて物もいはず。そなる所れ物の眞女を世尾よりも
なぐら彩町の妻よりぞ。五月雨がおそろしいそ
さまざまも彩のゆいやうが変ぬうりまに見えてもと
現引もせずくと泥て血刺を取さいかりを書
とりかげ見まぐ。なんくの物ち弟。それ元と二世を誓て
つまそなる門さへ毎物語れもりゆきを作り有られ
ども一云に君を思ひ方なほ入へ中べくひ君は物語

をそもしさのく詞紙の仁彩をうむり毎ぐ物
ろしい物をそ立毎おる糸ハ行いてぐらくてそなびく
いなそ物八十毎れ今そ見ぬ女見しそ言ひを
二面ふいひ合を物なく嘲るよ毎ば物合をを歌
よ見を物けるぐ物もそなる山吹ふ紙さぐん。いる物ま
ふう物も今ハ所ぐ物ふうよ物て輝もおりそふ
見面ぐ彩町毎ひをを所ふう所ふて出て毎歌詠
中絶者。毎ふ福ふりを見り花番所れ毎面ぐ月こそ楽
毎れ

姑氣賀卷之巳終